

中国・サハリン帰国者の家族史を語り継ぐことの意味

安場 淳
首都圏中国帰国者支援・交流センター

2025.1.4

多文化社会研究会の設立35周年、お喜び申し上げます。私はその35年のうちの後半の後半ぐらいに入らせていただいた者で、例会にもなかなか出席できずにおりますが、いつも刺激をいただいています。自分のいる場所から考え、発信させていただくことができれば、と思っております。

中国・サハリン帰国者の家族史を語り継ぐことの意味

中国/サハリン残留邦人・帰国者と呼ばれる人たちの人生に側面から関わらせていただいて40年が過ぎました。近年はこの人たちの人生の体験を次世代に語り継ぐ事業に携わっていますが、多文化の住民を包摂する日本社会にとってのその意義を年々より強く感じるようになっています。拙文ではこのことを、私個人の考えではありますが、簡単にお話したいと思います。

語られるべきは戦争が生んだ悲劇？

残留邦人の人生は何よりも、戦争によって国と国間で引き裂かれた個人の、そして家族の歴史です。戦争さえなければ自らの人生はこうではなかったはずだと思わない残留孤児・婦人はいないでしょう。敗戦によって敵国となった国に取り残され、長年帰国が叶わなかったという事実、更に、日本に“帰国”して味わった、自身の言葉と文化を否定される苛酷さ、その人生は国に何度も棄てられた民の悲劇として語り、語られます。

確かにそうなのですが、しかし、それは単純な悲劇の物語ではありません。一つには、残留邦人が中国やサハリンで育んできた家族の歴史は悲劇一色ではなかったからです。更には、その配偶者も、一世と共に来日した二世とその配偶者のたどった人生や自己に対する認識も、邦人本人とはそれぞれ異なります。その家族史を悲劇や棄民といった決まり文句に回収してはならないのではないかと考えます。

今に繋がり、未来に繋がっていく、無数の家族の歴史

ある中国帰国者三世の語る家族の歴史を聞いて、自らの家族史を振り返るきっかけになったと語ってくれた南米日系三世の若い友人がいました。国策による開拓移民という範疇だけ見ても、中南米への日系移民とその還流、戦後、満洲から引き揚げ、新天地を求めて南米への再移民した家族や、引き揚げ後、国外でなく、国内で再開拓に勤しんできた土地を福島原発事故により再び追われた家族とその後代が日本に暮らしています。多文化ルーツを持つ家族の中には、在日コリアンはもとより、インドシナ難民、条約難民など、戦争や内乱、とまでいかずとも国家に翻弄された結果、日本に住むことになったという家族が少なくありません。

多文化の隣人が珍しくなくなった今、互いに相手の文化を尊重する社会は目指されるものとして共通認識になりつつありますが、そのときに、互いの家族の歴史の尊重、その前提として自らの家族の歴史を知ることを目指せたら、と考えます。そのためにできることを非力ながら続けていきたいと考えています。多文化研の皆様のお力添えをいただけたら幸いです。

▼ご参考までに、二～四世としての発信の例です。

*二世:長江春子さん (2021)

『小春のあしあと 日本と中国の間に生まれた子の不器用な旅路』 a-Nest 出版

*二世:大橋春美さん

「先生、私の出身を皆には言わないで」

https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kokoro/jinken/gakko/documents/4-8_1.pdf

「満蒙開拓の記憶」 <https://sbc21.co.jp/tv/sensouarchives/record05.php> 他

==== 研究者として立つ三世四世の中では、

*三世:山崎哲さん https://researchmap.jp/yamazaki_satoru

三世としての当事者研究

*四世:森川麗華さん <https://researchmap.jp/morikawa.reika>

中国残留婦人の歴史社会学的研究等

著者プロフィール：

安場 淳

首都圏中国帰国者支援・交流センター勤務。1984年より埼玉県の中国帰国者定着促進センターにて未就学児から90代までの中国(1998年より+サハリン)帰国者の日本語・日本事情の学習支援と教材開発に携わり、その中で、全国の帰国者や外国ルーツの子ども達・生活者の支援者との連携を深めようと努めてきた。2005年から全国の支援者間ネットワーキングのためのML管理人、2017年から中国・サハリン帰国者の体験を語り継ぐ次世代の語り部育成・派遣事業を担当中。